

万斛遺跡 8 次発掘調査 — 現地説明会資料 —

浜松市文化財課・株式会社アコード 2024.12.14

1. はじめに

万斛遺跡は、静岡県浜松市中央区中郡町に所在する中世～近世の遺跡です。当遺跡の位置する積志地区周辺には、天竜川が形成した沖積平野が広がっています。天竜川は、近世以降の河川改修によって、流路が固定されましたが、改修以前は氾濫を繰り返し、平野内に支流が網目状に展開していたと考えられます。当遺跡の東を流れる安間川も天竜川の支流の一つにあたります。天竜川の支流に挟まれた場所には、安定した微高地が形成され、遺跡の分布がみられます。万斛遺跡もこのような地形上に立地しており、今回の調査区は、安間川沿いに形成された標高 15m の微高地上に所在しています。

本調査地の南には土豪沢木家の居館などが想定されており、永禄年間（1558～1570）まで文献上でその名が確認できます。また、当遺跡の西側に位置する万斛西遺跡には、旧鈴木家屋敷跡が所在します。旧鈴木家屋敷跡は、江戸時代に浜松藩主に直接謁見の許された「独礼庄屋」の筆頭鈴木家の屋敷跡であり、これまでの発掘調査において、戦国時代に遡る区画溝などが確認されています。

現在まで万斛遺跡における発掘調査は、小規模な調査の実施に留まり、中世の遺物が確認されているのみで、遺跡の具体像は明確になっていませんでした。今回の発掘調査の結果、中世の建物跡などの遺構が確認され、当遺跡において初めて中世の集落の存在が明らかとなりました。



万斛遺跡周辺の遺跡分布状況

4. B 区の調査概要

B 区では、A 区で確認された地形の落ち込み部分が確認されるとを想定されましたが、東側北端で基盤層となる礫層がわずかに弧状に確認された以外、A 区とは異なる土層堆積状況が確認されました。A 区の遺構検出面にあたる暗褐色砂質土層は確認されず、礫層直上には黄褐色砂質土が堆積しており、この層の上面から遺構の掘り込みが認められました。

調査区の西端では、緩やかに落ち込みながら、南端で約 60 cm 程度低くなる谷地形が見つかりました。全体の地形は北東方向が最も高くなり、柱穴などが検出された調査区の中央部付近は、平坦な地形を呈していることが確認されました。

検出した遺構は、小穴を中心に土坑や溝なども確認されています。小穴は建物の柱穴と考えられ、建物の平面プランが不明瞭なものが多く見られますが、調査区の中央から西側において、少なくとも 2 棟以上の掘立柱建物跡を検出しました。北側で確認した掘立柱建物跡（SH02）は、梁行 2.6m × 桁行 3.0m 以上の規模をもち、柱穴内からは鎌倉時代とみられる山茶碗の破片が出土しています。また、調査区の南壁際では、土坑（SK257）内から、赤褐色の平坦な流紋岩の石が出土しており、礎石建物の存在が想定されます。

小穴や土坑内からは、中世を中心とする遺物が出土しており、山茶碗が複数個体出土した土坑（SK283）やロクロ成形のかわらけが出土した小穴（SP262）も確認されています。

その他にも調査区の東側において、幅 40cm 前後の小溝（SD334、359、369、370、373、374、375 など）が検出されています。溝の長軸方向は不揃いであるため、今後の検討が必要ですが、畑の畝溝などの可能性が考えられます。



B 区 掘立柱建物検出状況

2 棟の掘立柱建物跡が検出された。周辺には同規模の小穴が多数確認されており、より多くの建物の存在が想定されます。



B 区 SK257 石材出土状況

周辺で採取される円礫とは、石材とは異なり、平坦面を持つことから、礎石として利用された可能性がうかがえます。



B 区 SK283 山茶碗出土状況

小穴や土坑内からは、山茶碗を中心に、陶器やかかわらけなどの鎌倉時代の土器片が出土しています。



主な出土遺物

出土遺物は、鎌倉時代の土器を中心に、平安時代や室町時代以降の遺物も確認されています。

※注意事項

- ・浜松市のホームページ、市刊行物等で現地説明会の様子が紹介される可能性がありますので、あらかじめご了承ください。
- ・SNS やインターネットに写真・動画を掲載する場合は、個人が特定されるような写真や動画の掲載を控えていただくようお願い申し上げます。

万斛遺跡 8 次調査の成果

2. 調査の概要

今回の発掘調査は、浜松環状線の道路改良工事に先立ち実施しました。調査区は、北側調査区を A 区、南側調査区を B 区として実施しました。

各調査区に国土座標世界測地系により各グリッド (5 m) を設け、北端を A とし、南北を 0 とし調査を実施しました。

各調査区は、試掘調査の結果に伴い、表土下 0.6m ～ 0.75m を重機により表土掘削を行を行った後、人力により包含層掘削と遺構検出を行いました。

3. A 区の調査概要

A 区では調査区中央部で基盤層（礫層）が高くなり、東西では地形が低くなることから、大きく遺構検出面に高低差がありました。

調査区の東側及び西側では、礫層直上に堆積した暗褐色砂質土上面において、遺構を検出しました。

調査区の東側において、掘立柱建物跡（SH01）を 1 棟確認しました。建物の規模は、梁行 2.8m × 桁行 2.2m 以上を測り、調査区の東側に及んでいます。なお、周辺には複数の小穴が確認されており、柱穴の可能性が考えられます。

中央部の砂礫層の高まり部分では、小穴がわずかに確認されましたが、明確な遺構はわずかでした。

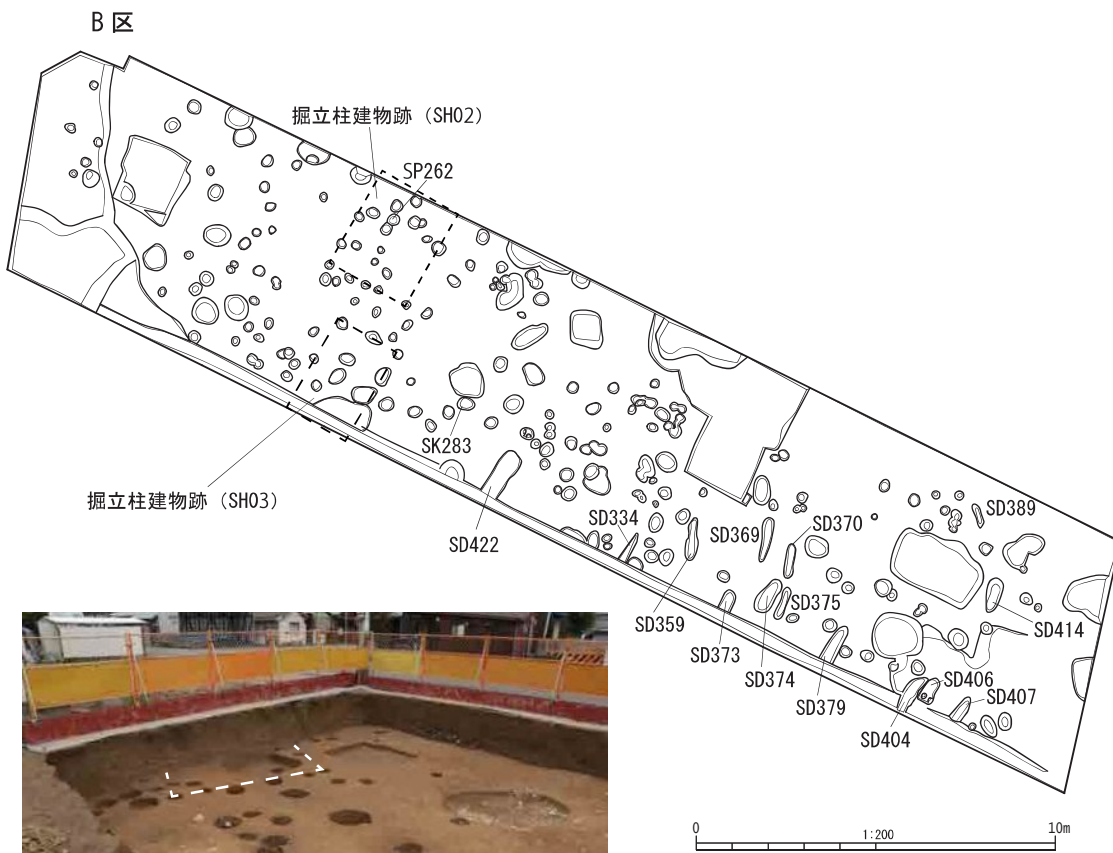
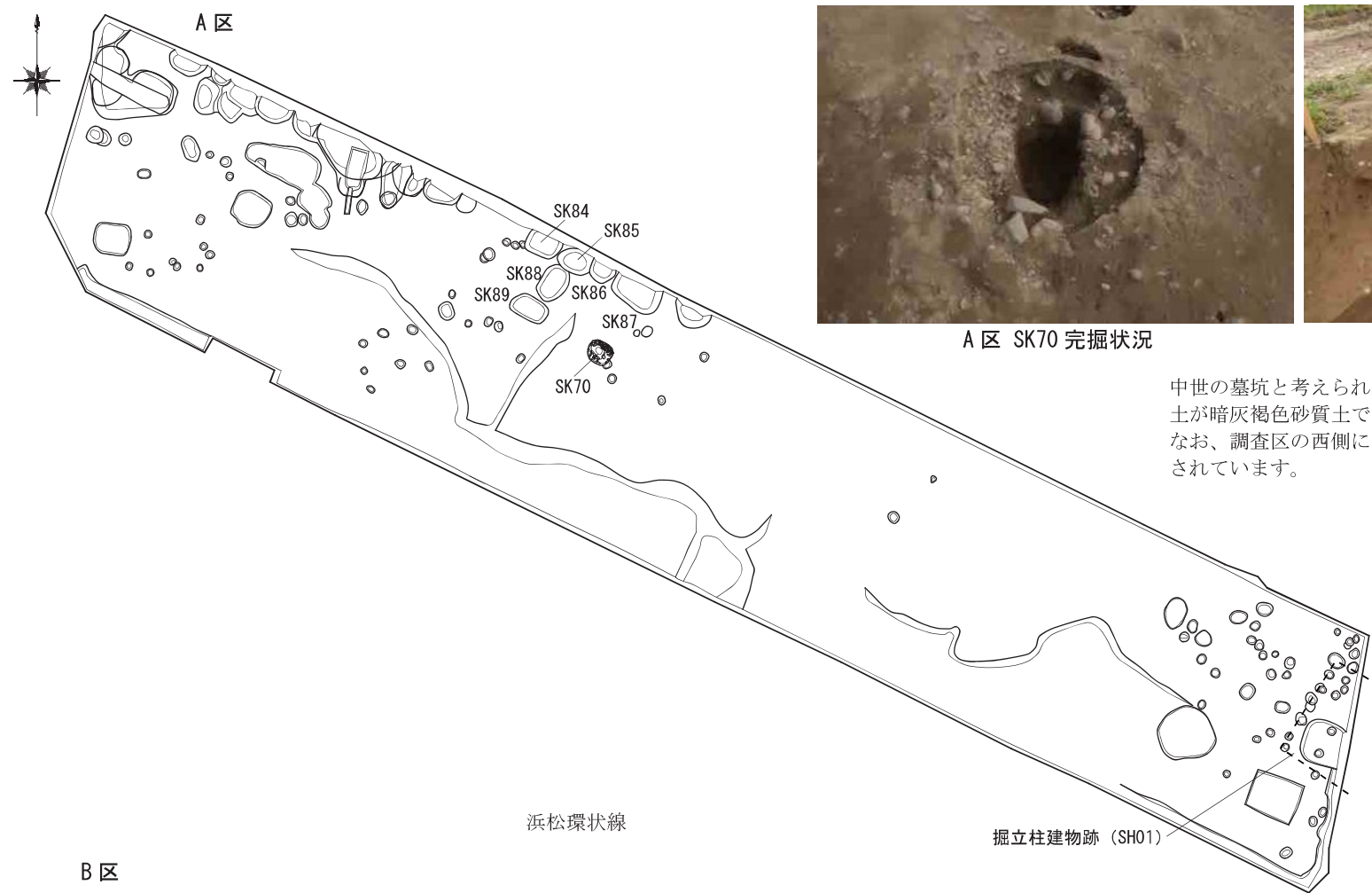
中央部の西側で炭化材を含む土坑（SK70）などを確認しました。

SK70 は、東西 0.85m × 南北 0.7m を測る、東西方向にやや長い楕円形の土坑です。床面に炭化材が約 3 cm 程度堆積しており、炭化材中から永楽通宝が 1 枚出土しました。炭化材下部は、約 30cm 程度の掘り込みを確認しましたが、明確な遺物は出土しませんでした。

その他にも SK70 の北側において、隅丸方形の土坑が数基（SK84 ～ 89）確認されており、土坑内からは山茶碗などの遺物が出土しています。

今回の調査対象地の北側は、近年まで墓地として利用されており、今回の発掘調査で確認した土坑は、何らかの墓坑の可能性が考えられます。

また、調査区の南西部では、現状道路面下部に向かって、緩やかに傾斜することを確認しました。傾斜部の埋土からは、山茶碗や羽付釜などが出土しています。



A 区 掘立柱建物跡検出状況

今回の発掘調査において、A 区で確認した掘立柱建物跡は、1 棟のみでしたが、規則的に並ぶ小穴が複数基確認されており、東側に集落が広がる可能性が考えられます。



A 区完掘状況